■建前としてのありがとう、

本音としてのありがとう

修正：　2019.05.01

投稿：　2019.05.01

●建前としてのありがとう、本音としてのありがとう①

誰しも子供の頃、両親から、
「人に何かしてもらったときには、
**　ありがとうと言いなさい！」**と、
躾られたことがあると思います。

親「人から何か貰ったら、言うことがあるやろ？（｀・ω・´）」
子「ありがとぉ～、ござぁいましたっ！　ヾ(@°▽°@)ノ」
親「はい、よくできました！（*＾ー＾)ノ」
子「えへへ♪（=⌒▽⌒=）」

と、ごくごく当たり前の、
微笑ましい家族の光景のように思えます。

ただ、水を差すようですが、はっきり言いましょう。
そういうのを**「建前」**と言います。
「ありがとう」とは「ありがたい」からこそ、
自然と口から出てくる言葉、ではないでしょうか。

もしあなたが親であれば、自分の子供に、
どのような大人に育ってほしいと思っているのでしょうか？

「ありがとう」と、建前で立派に感謝できる、
本当はこれっぽっちも感謝していないにも関わらず、
あたかも感謝しているように思わすことができる、
そういう立派な大人に育ってほしいのでしょうか？

「おほほ、うちの自慢の息子は、
**　人様にちゃんとお礼が言える、良い子ざます。**
**　ただし建前ざます。偽善者ざます。おほほほほ。」**

それとも逆に、自分の心に正直に生き、
本音で語り合った結果、ときに人間関係を壊すこともあるけれど、
「ありがたい」から「ありがとう」と伝えられる、

心通う大人に育ってほしいのでしょうか？

当然、心ある大人に育ってほしいに決まってますが、
しかしその一方で、子供に対して、
親「ありがとうと言うようにしなさい！」と、
人から嫌われないようにする方法を教えるだけというのでは、
言っていることとやっていることが違うと言えるでしょう。

そもそも、本音で会話することは、
建前で会話するよりも遥かに**難しい**ことなのです。そして、
建前でコミュニケーションする方法は、口で伝えることができますが、
本音でコミュニケーションする方法は、**教えることができない**のです。

（続）

//==========//

●建前としてのありがとう、本音としてのありがとう②

「心無きありがとう」について取り上げました。
そういうのを建前のコミュニケーションと言います。対して、

「ありがとう」と思っているから「ありがとう」と言うのは、
心の中で思っていることと、口にすることを一致させる、
本音のコミュニケーションです。しかし、なぜ、私たちは、
本音でコミュニケーションしようとはしないのでしょうか？

それは、思っていることがそのまま相手に伝わってしまうと
人間関係が壊れかねない、と恐れているからです。ゆえに、
本心を隠して美しい言葉だけでコミュニケーションしようとします。

そうして、心の汚さが内から外へ流れるのを
せき止めているのです。しかるに、本当に**「内から外へ」**の流れで、
本音でコミュニケーションするためには、

「心が綺麗でなければならない！」

ということが絶対条件になってきます。
心の美しさは繋がりの深さなのです。つまり、
薄っぺらい人間関係しか構築できない理由の一つは、
単純にその人の心が醜いということが原因です。

「心の中なんて誰も覗きはしないのだから…」とか、
「バレなきゃいいんだよ、バレなきゃ！」などと考え、

心の中で薄汚い想いを巡らせ続けていれば、
その醜さを隠すため、口先だけの
感情の通わないコミュニケーションをし続けなければなりません。
だから会話がつまらないのです。

心通う繋がりを求めているのであれば、
心から綺麗にしていかなければなりません。
信じないかもしれませんが、心の美しさは人格の高さであり、
そして繋がりの深さなのです。

（続）

//==========//

●建前としてのありがとう、本音としてのありがとう③

心の美しさは人格の高さであり、

そして繋がりの深さである、という話でした。

学生のうちは、気の合う人とだけ
仲良くできればそれで済んでいましたが、
社会人になると、年が離れた人とも
上手くやっていかなければなりません。

それどころか、営業のような対人的な仕事になると、
幅広いお客様を相手に関係を作っていかなければなりません。

そのような社会人にとっては、
「建前」のスキルは必須でありましょう。
好き嫌いできるのは学生のうちだけかもしれません。

しかし建前や社交辞令というのは、
相手に嫌われないための、最低限のコミュニケーションにすぎません。
相手と仲良くなればなるほど、自分を隠すことは難しくなりますから、
建前のコミュニケーションではどうしても限界があります。

そして建前で嫌われないように接していれば、
仲良くなればなるほど「本音」の部分が知られてしまい、
「建前」が「本音」と一致していないことから、
やがてどのみち嫌われていきます。もし、

末永く仲良くやっていける人(親友や運命の人など)と
より早く巡り合いたいのであれば、
最初から本音で語り合わなければなりません。

しかし私たちは、これとは裏腹に、
出会った当初ほど、相手に嫌われないように、
丁寧に丁寧に接する傾向があります。

理想を言えば逆にすべきです。
時間が経ってから嫌われていては、
積み重ねたもの全てが**無駄**になるからです。

どうせどこかで崩れる関係なら、最初から崩れた方がいいのです。
どうせどこかで嫌われるのなら、最初から嫌われた方がいいのです。
そうした方がお互いに、失うものは少なくなるのですから。

建前と本音の使い分けは大切ですが、
関係を長く続けるつもりなのであればあるほど、
最初から**「本音」**を意識して接したいものです。

（続）

//==========//

●建前としてのありがとう、本音としてのありがとう④

3 回にわたって建前のコミュニケーションと
本音のコミュニケーションについて述べてまいりました。

建前のコミュニケーションとは、
「思っていること≠口にすること」のコミュニケーションです。
対して、**本音**のコミュニケーションとは、
「思っていること＝口にすること」のコミュニケーションです。

本音のコミュニケーションを目指すということは、
気持ちをごまかさず、そのまま口にしていくということですから、
言葉だけでなく、心の中まで綺麗にしておかなければなりません。

さらに、口にしたことは行動に移すべきですから、
全体的には**「気持ち→発言→行動」**となります。
心の内側から体の外側へ流れていっているイメージです。
「内から外へ」の原則です。

行動して成し遂げる、思いを形にする、と言うことは、
つまり自己実現すると言うことです。例えば、組織において、
自己実現している人と言うと、組織のリーダです。
会社であれば経営者(と言うより創業者)です。

こういう背景もあって、組織のリーダほど
本音のコミュニケーションを求める傾向があります。

本章の最初(コミュニケーションにおける建前と本音①)
に戻りますが、もしあなたが親であれば、
自分の子供にどう育ってほしいのでしょうか？

本音でコミュニケーションできる大人に育ってほしいのであれば、
まず、**親が本音でコミュニケーションできている**ことが必要です。
それは例えば、**自己実現しているかどうか**で判断できます。

子供は親を見て育ちますから、
子供には建前の人生は歩んでほしくない、と言うのであれば、
親も親で、本音の人生を歩んでいかなければなりません。

（完）

//==========//

Web サイト：
心を力学する　―原理・原則に基づく生き方を考える―

著者：
時無 和考(Tokinashi Kazutaka)